がん哲学外来市民学会ニュースレター

Cancer Philosophy Clinic Association for the People

第4号
2014年6月5日
発行者

がん哲学外来市民学会
〒385-0046 長野県佐久市前山321-3
がん哲学外来研修センター
電話0267-63-5369 FAX0267-63-5389
E-mail:shimin@gantetsugaku.org
http://www.shimingakkai.org/

次世代のがんチーム医療
～オアシスを求めて～

「がん哲学外来市民学会」代表
順天堂大学医学部病理・腫瘍学教授　樋野　興夫

がんの研究の目標は、「人のからだに巣食ったがん細胞に介入して、その人の死期を再び未確定の彼方に追いやり、死を忘却させる方法を成就すること」である。しかし、人は最後に死ぬという大切な仕事が残っている。

ヒト発がん研究の目的は『がんの原因論』を明確にし、『がんの制御』の根拠を示し、『がんの進展阻止』の実際を示すことである。いずれは発がんに至るとしても80才で発症するのと、40才で発症するのとは大きな違いである。最終的には長寿社会においては『がん細胞との共存』するしかないであろう。「天寿がん」の実現化である。

「科学としてのがん学」を学びながら、「がん学に哲学的な考え方を取り入れていく領域がある」との立場に立ち「がん哲学」を提唱するものである。病理学は顕微鏡を覗きながら、大局観を持つことが求められる分野でもある。

「がん細胞で起こることは、人間社会でも必ず起こる」（病理学者・吉田富三）。がん哲学者は、高度な専門知識（がん学）と幅広い教養（哲学）を兼ね備えている人物のことであり、視野狭窄にならず、複眼の思考を持ち、教養を深め、時代を読む「具眼の士」である。

①『複雑な問題を、焦点を絞り単純化する』
②『自らの強みを基盤にする』
③『無くてならないものは、多くない』
④『無くてよいものに、縛られるな』
⑤『Red herringに気をつけよ』

そうすれば、少し腹が据わってくる。

もう一つ、尺取り虫。「自分のオリジナルポイントを固めてから、後ろの吸盤を前に動かし、そこで前に進む」。自分のオリジナルポイントを固めてから前に進む。がん細胞も然り。「がん哲学」はこういう人物になれということでもある。

「電子計算機時代だ、宇宙時代だといってみても、人間の身体の出来とその心の動きは、昔も今も変わってはいない。超近代的で合理的といわれる人でも、病気になって、自分の死を考えさせられる時になると、太古の人間に還る。その患者が医師に訴え、医師を見つめる目つきは、超近代的でも合理的でもなくなる。静かで、淋しく、哀れな、昔ながらの一個の人間に還るのである。その時の救いは、頼りになる良医がそばにいてくれることである」（吉田富三）。その時に何が重要かというと、まず第一に、「暇げな風貌」。忙しくしていたら患者は心を開けない。

第二に、「偉大なるお節介」。余計なお節介と偉大なるお節介は同じように思えるかもしれないが、相手の必要に共感する事が〝偉大なるお節介〟で、自分の気持ちで接するのが〝余計なお節介〟である。それで「偉大なるお節介症候群」項目10か条をつくって「偉大なるお節介症候群」認定証を作って皆さんに差し上げている。「自然の中に隠された真実はいつも美しく、これを追求する仕事は清く美しいものだが、人間の中に隠された真相はいつも汚れて醜く、これを追求する仕事は、いつも人間の寂しさの涙の井戸をくみ上げることだ。」（吉田富三）。来訪者は話をしていて必ずと言っていいほど泣かれる。

第三に、いいと思ったことは躊躇せずにすぐに実行する「速効性と英断」。「虫が虫の生態現象を、その住家である泥の立場からだけ論じる場合それが学問的と呼ばれる。しかし、向上心のある虫が空に浮かぶ雲の立場から虫の生態を考察するとたん、学問的という形容詞は付かないのである」（新渡戸稲造）。今も昔も勇気ある「向上心のある虫」は少ない。

「陣営の外に出る」とは、自分の脇を甘くして、付け入る隙を与え、懐の深さを示すことであろう。大いなる人物というのは、収穫物というのは、存命中に実を結んだものだけではない。故に後世に生まれた我々がこれを『温故』し『創新』することによって現代に貢献できる。これは「勇ましき高尚なる生涯」である。がん哲学外来の基本精神は、「奥ゆかしさは最も無駄のない立ち居振る舞い」である。

講演会「がん哲学～われ21世紀の新渡戸稲造とならん～」
2014.3.26　ロンドン大学にて

がん哲学外来市民学会 第3回大会の成功を

市民学会第3回大会 大会長
福井県済生会病院　院長　田中 延善

がん哲学外来市民学会 第3回大会

Cancer Philosophy Clinic Association for the People

大会長：福井県済生会病院 院長　田中延善

「がん哲学外来の見据える
これからのイノベーション」

日時　2014年 7月13日(日)
9時30分～16時（受付開始：9時）

会場　福井県県民ホール
（福井市手寄1丁目4番1号AOSSA 8階）

今や、がんは不治の病ではなくなり、がんとの共生が求められています。がん診療の有り方が変化していく中で患者を如何に支えていくかが課題となっていますが、各地域で開催されている「メディカルカフェ」は、地域における患者・家族のニーズや課題に応える取り組みとなっており、がん診療の有り方を変えたことから、まさにイノベーションと言えます。

古来より日本では和を大切にし人と人、人と自然の調和を心がけてきました。お互いに傾聴し対話し、多様な考え方や意見を結集することで新しいアイデアが生まれます。福井の地で開催される今回の大会ですが、がん哲学外来のこれからについて、患者、家族、医療従事者、市民の皆さんが対話することで新たな価値が創造できることを念願しています。

昨年七月に新設した「なでしこプラザ」に、これまで分散していた患者サービス部門を集約することで患者サービスの質向上を図り、患者ではなく人を診るとの観点から医療スタッフが中心となり活動しています。メディカル情報サロン（なでしこプラザ内）に集学的がん診療センターを移設し、がん診療体制を見直しました。それまでのがんサロンはがん哲学外来・メディカルカフェに進化し「偉大なるお節介症候群」の思いをベースに患者・家族の心に取り組んでいます。メディカル情報サロンにおける様々な活動は、医師以外のスタッフ（がん認定看護師、臨床心理士、音楽療法士、MSW、図書司書ほか）が担い、がん専門医と協働して運営されています。

さらに、がん診療デシィジョンツリーによる治療の視覚化、外来待ち時間に気楽に勉強できるがん情報ミニレクチャー、市民公開講座等、がん情報に触れる機会を設けています。昨年十月からのハローワーク福井との協働によるがん患者就労支援は、働きたい患者のニーズに応えたもので一般病院では初の試みです。がんの親を持つ子どもへの支援も開始しています。これからも、がん哲学外来への取り組みから市民のニーズに応えていくことでイノベーションに繋げていきたいと考えています。

福井の美味しいコシヒカリ、お魚、お酒で学会の疲れを癒し、日本一の恐竜博物館や東尋坊を楽しんでいただければ幸いです。

北陸の地「福井」で

福井県済生会病院
外科主任部長　宗本 義則

がん哲学外来、カフェは全国に広がり、各地で進化していっています。がん患者さん、およびご家族の方には心のよりどころとなり、この上ない喜びとなっています。

このカフェに関して活動の質を維持し皆に認められるものにする必要があり相応の資格を持つことが必要とされています。そのための養成講座であり、H27年度以降は「がん哲学外来カフェ」には少なくとも一名の学会認定「がん哲学外来コーディネーター」による開催が望まれるようになりました。

がん哲学外来コーディネーター養成講座は、今までは「佐久」で開催されていましたが、今回初めて北陸の地「福井」での開催となりました。これも、がん哲学外来、カフェが全国にひろがり各地で進化していく上で必然的なことであり、今後全国の色々な所で講座の開催が望まれるでしょう。当院の臨床心理士の車屋知美を中心に、事務局・ファシリテーターと連絡をとり非常に内容の濃い講座となりました。がん哲学外来の可能性についてみんなで討論します。

がん哲学外来市民学会第三回大会は、当院の田中延善院長を大会長とし、集学的がん診療センターの吉川千恵マネージャーを中心に準備が進められています。全国で活躍中の高名な先生をお招きし、がん哲学外来の見据えるこれからのイノベーションというテーマでワークショップ、シンポジウム、ディスカッションなどが行われます。このように有名な先生をこれほど多く福井に集めた大会はまれであります。非常に興味のある内容でとても為になるかと思います。

ここ福井は、47都道府県の幸福度に関する調査で「幸せ日本一」になった県です。七月、皆さんにこの「幸せ日本一の福井」でお会いできることを心より楽しみにしています。

ようこそ！福井へ

福井県済生会病院
臨床心理士　車屋 知美

昨年、がん哲学外来コーディネーター認定制度が設けられ、今後ますます各地でのがん哲学外来やカフェの盛り上がりが期待される今年、福井県で「がん哲学外来市民学会第3回大会」と「第4回がん哲学外来コーディネーター養成講座」が開催されます。

養成講座は「がん哲学外来の可能性」をテーマにし、これからのがん哲学外来のあり方を考える良い機会となるように、内容や企画を練りました。

福井県は自然に囲まれているので、食べ物が大変美味しい所です。養成講座では、夕食時に福井名物のソースかつ丼やおろし蕎麦をお出しする予定です。大会、養成講座に参加される方々には、食べ物以外にも福井の人や物、名所などいろいろと楽しんでいただき、思い出をいっぱいにして帰っていただけたらと思います。

北陸という交通の便が不自由な地域での開催ですが、これからのがん哲学外来市民学会の活性化につながるように、当日はもりもり盛り上げていきたいと思います。皆様のご参加を心からお待ちしています。

がん哲学カフェ in UK & 緩和ケアの祖を訪ねて

安藤　潔

3月23日より27日まで市民学会の有志と一緒に緩和医療の先進国である英国を視察してまいりました。今年は冬の寒さが残り、出発前はつぼみも硬かった桜が帰国してみるとすでに五分咲きであっけなく春を迎えた気分でした。

なぜ英国だったのでしょう？英国は社会保障の発祥地であり、「揺りかごから墓場まで」のキャッチフレーズを持つその制度は世界一、と昔学びました。わが国の国民皆保険も英国の国民保険サービス（NHS）をお手本としたものです。

しかしその後の経済の停滞から、1980年代のサッチャー政権は医療費抑制政策を施行し、医療現場を荒廃させてしまいました。その反省から、今世紀に入るとブレア政権は医療費抑制をやめて医療制度の再建を図り、今日の英国医療の復活があります。日本の現状を先取りした英国の医療の歴史からわが国が学ぶべきことは多々あるはずです。

今回私たちは、1906年に世界で最初に設立されたホスピスであるセント・ジョセフ・ホスピス、近代的疼痛緩和を始めたセント・クリストファー・ホスピス、そして未来像としてのマギーズハウスの3施設を見学しました。施設としていずれも美しい建築物であり、人生の最期の日々を過ごす患者さんが、大切な人々とゆったりと豊かな時間を過ごせるような工夫がすみずみに見られました。これを支える経済基盤はNHSから支払われる保険料に加えて、多額の寄付金であることが日本との大きな違いでした。社会から得た利益は社会に還元するというチャリティー精神です。

また、それぞれの施設が多くのボランティアによって支えられていることも驚きでした。レベルの高い緩和医療を実現するためには多くの人手が必要ですが、いずれのホスピスも300～450人のボランティアが関与しているとのことでした。ボランティアは週に一回でも月に一回でも、仕事や勉学の合間を縫ってホスピスで働き、ケアの質を維持するために実にきめの細かい情報の共有が行われています。真の意味のチーム医療が実現している姿に感銘を受けました。

医療は人の手によって行われるものです。ホスピス専属のスタッフに加えて、これだけのボランティアの手があればケアも豊かになります。

このようなボランティアの背景には、自分たちの居住区の医療は自分たちが担う、という市民のネットワークがあるように見えました。かつてわが国にも江戸260年間に創りあげられた濃密な地域ネットワークが、相互扶助のために機能していたはずです。しかし明治以降近代化とともに都市に人が移動し、更に戦後の自由主義と個人主義を謳歌する時代精神は地域ネットワークを希薄なものにしていきました。それに替わるものとして形成された職場ネットワークも、近年の終身雇用制の崩壊によって失われつつあります。

英国の視察を終えて、私は全国に拡がるがん哲学カフェが新たな地域ネットワーク再生のきっかけとなることを夢見ています。

（東海大学医学部血液・腫瘍内科）

緩和医療の先進国

東　英子

三月末、「がん哲学カフェ in UK & 緩和ケアの祖を訪ねる旅」に参加させていただきました。平素、在宅診療をしている立場から、二箇所のホスピスを見学させていただいた感想を綴ってみたいと思います。

セント・ジョセフ・ホスピスで心に残ったことは、非がんの患者さんもホスピスに入れること、そして、2012年から始まった、ロンドン初の取り組み、1st contact team の存在でした。全ての人に平等に開かれ、誰にとってもアクセスしやすいホスピスであるために作られた制度で、登録した患者さんは、自分で電話連絡することにより入院することができ、また入院を希望した患者さんは、24時間以内に入院できます。専属の看護師さんが患者さんの状況に応じて必要部署にさっと振り分け、必要なケアを受けて、二週間以内にコミュニティに戻ることができます。ホスピスとコミュニティとの連携も密で、こんな制度があれば、安心して在宅で生活することができると非常に感銘を受けました。

それから、リハビリテーションの考えがしっかりしていて、今の状態で使える身体機能を最大限活用し、適応する方法を考え自立を促している点は、ついつい慰安的になりがちな日本のリハビリテーションとの大きな違いだと思いました。また、栄養士がリハビリテーション部門に含まれていることは、摂食嚥下機能評価の面からもとても羨ましいシステムでした。

セント・クリストファー・ホスピスでは、医療関係者の紹介があれば、入院・外来患者さんのみならず、ケアラーやご遺族も補完療法を受けることができます。一回のセッションは短く、一人3セッションまでと制限もありますが、終末期の余命一週間以内などという状況下では毎日セラピーを受けることもできるようで、そのシステムの柔軟性も素晴らしいと思いました。リハビリテーションでは、日本の Wii Board がプログラムに取り入れてあり、バランス訓練によいとのことでした。日本で Wii をレクリエーションプログラムに取り入れているのは見たことがありますが、リハビリテーションプログラムに取り入れていることにも対応の柔軟さを感じました。

両ホスピスに共通して感じたことは、チーム医療としての各職種の自立性と、地域との風通しのよさで、何となく医師主導である日本のチーム医療は随分遅れていると思いました。制度を変えるということはたやすいことではなく、例えば 1st contact team は定着するまでに一年半もかかったそうです。旧態依然とした医療体制からの脱却をはかるには何処から手をつけるべきかと思いを巡らせている今日この頃です。

（あずま在宅医療クリニック）

美しい外観のマギーズハウス（ロンドン）

緩和ケア発祥の地

樋野 興夫

「がん哲学カフェ in UK & 緩和ケアの祖を訪ねる旅」を終えて無事帰国した。今回の視察は、歴史的大事業であり、参加者にとっては人生の良き想い出となることであろう。

3月24日は、緩和ケアの発祥であるセント・ジョセフ・ホスピスの見学・セミナーに出席した。

特に、「1st Contact Team」、「Volunteering」のコンセプト&内容には、大いなる感動を覚えた。「患者視点のチーム医療」の在り方の学びであり、日本国の遅れも痛感した。誇りを持って、役割を遂行されている、数百人の多数のボランテイアの生き生きとした風貌には、人間の使命をも感じた。

25日は、ロンドンの街を散策後、日本国大使館を wife と訪問し、大使と医務官と面談し、The Athen(a)eum クラブで、昼食を一緒にしながら、広々と人生を語る機会が与えられた。何らかの「日英医療協力」に展開出来得れば、最高である。その後、Charing Cross Hospital の敷地内にあるマギーズセンターを訪問した。Centre Head のお話を伺い、存在の目的と意義を学んだ。自由に、ふらっと立ち寄れる相談の場があることは、患者・家族にとって、大いに慰められることであろう。

26日は、現代ホスピスの祖と言われる Cicely Saunders が始めたセント・クリストファー・ホスピスの見学・セミナーに出席した。特に「Nursing」、「Social Work & Bereavement〈死別〉」について教育の大切さを学んだ。その後、ロンドン大学に向かった。

夕刻、ロンドン大学では先ず、Death Café の提唱者のお話を聴き、その後、6～7名の小テーブルに別れて対話し、休憩を挟み、筆者は、講演「がん哲学～われ21世紀の新渡戸稲造となられん～」の機会が与えられた。会場一杯で、在英日本人、英国人も、全くと言ってよいほど、ご存じない「がん哲学&新渡戸稲造」の話を熱心に、聴いて下さった。

「がん哲学&新渡戸稲造」は、現代の世界情勢と、混迷感のある時代において、日本国の存在を語るのに、極めて良いテーマであると、実感する時となった。

「人間学」は世界共通である。

視察ツアーをお迎えして

ロンドン在住　中村 真理

昨年の夏に（株）ウイズネットより、樋野先生率いるロンドンツアーのコーディネートの依頼を受けました。それは、私が現在、セント・ジョセフ・ホスピスでヒーリングと、またホスピスから患者の自宅訪問（運動療法、カウンセリング、ヒーリングのセット）の二つのボランティアをしており、現地の事情に明るいということからでした。

それまでの私はロンドンの日系企業に勤めながら、カウンセリングやヒーリングを長年勉強してきまして、その会社を辞めたのを機に、これまで勉強した事をぜひ実践したいという思いからホスピスでのボランティアを始めました。

今回の事がご縁で、「がん哲学外来」という活動が日本国内で広まっている事を知りました。そして、医療者と患者という関係だけでなく、心理面からも患者を支えているということに賛同致しました。

この素晴らしい活動をロンドンでも広めるには?と調べる内に、実は英国でも既にデス・カフェ（Death Café）（死のカフェ）という、同じような活動が広まっていることがわかりました。また、マギーズセンターと呼ばれるがん患者の心の拠り所、癒しのスペースとなっている施設がある事も分かりました。

デス・カフェとはその一見怖い名前の響きとは異なり、紅茶を片手に死について自由に話し合う場を提供するというもので、その活動はイギリスで起こり、現在ヨーロッパ、アメリカ、オーストラリアへと広まっています。心理療法士が進行役となり、病気の人だけでなく健康な人も自由闊達に死を語る事が出来ます。その根底にあるものは、死を考える事は人生をより良く生きる方法を考える事といった、自ら悟っていくという概念があり、「がん哲学外来」の方がカウンセリング的な要素が強いようです。

実際イギリスではカウンセリングが日本より根付いています。なので、深刻なケースはカウンセリングが勧められ、デス・カフェの役割とは異なります。日本では、むしろカウンセリングとデス・カフェがドッキングしたような、どちらの役割をも含んだ「がん哲学外来」の方が、即戦力的に患者を助けられるように感じました。

26日の夜には日英合同のセミナーがロンドン大学で行われました。前半はデス・カフェを日本からの方に実体験して頂き、後半では逆に英国人及び在英日本人に「がん哲学」を知っていただく為に樋野先生の講演を行いました。予定を上回る多数の申し込みがあり、実際に英国で参加された方の感想は、とても楽しくそして為になり、参加して本当に良かったというものばかりでした。

日本から参加された方々はそれぞれの分野で活躍されているプロフェッショナルな人達でしたが、デス・カフェの準備の際はテーブルセッティング、お菓子の仕分け、案内役を快く引き受けていただき、またロンドンで参加する人達の為に各地のお菓子を沢山持参して頂き大変好評でした。特に随所に細やかな心遣いが感じられ、久し振りに日本や日本人の良さにも触れることの出来た貴重な一日でした。

今回多くの方々と出会い、そして交流し、この企画が成就出来た事を大変光栄に思っております。

セント・ジョセフ・ホスピスでのレクチャー

患者家族・遺族へのケア

中川 奈保子

今回のツアーではどの施設でも患者さんだけでなく、患者さんを看護するご家族に対する支援も行われていました。そして患者さんが亡くなった後も、希望者には遺族カウンセリングが提供されています。病気と闘う患者さんだけでなく、患者さんを支えている間と亡くした後の患者家族や友人に対しても、当然のように支援が行われていることは、素晴らしいことだと思いました。

またセント・クリストファー・ホスピスのソーシャルワークチームの方のお話も印象に残っています。遺族の中には親を亡くした子どもたちもいますが、生前の早い時期からその事実に関わった子どもは、親を亡くした後の立ち直りが早いと話されていました。そのため、担当者は親の生前から子どもたちと関わりを持つようにしているそうです。親を必要とする年齢の子どもに親の病気と余命について伝えることは難しく、親たちにとってもどうして良いかわからない問題だと思いますが、その時にソーシャルワーカーさんの助けを得ることができれば、どれほど心強いことでしょう。子どもたちにとっても、つらい時間を一緒に寄り添って歩いてくれる人が家族以外にもいるということは、大きな支えであろうと思います。

私の仕事は患者さんやご家族・ご遺族に対して今回訪問した施設の方々のような関わりを持つことは少ないのですが、今回英国で学んだことを現場で働くスタッフや関係する方々に広く発信して、闘病中だけでなくその後の状況まで考えながら患者さんとご家族への対応を行うためのヒントを提供できればと思っています。

（鳥取大学医学部附属病院
認定遺伝カウンセラー）

セント・ジョセフ・ホスピスにて説明を受ける

英国のホスピスに学ぶ

安井 禮子

今回訪問したホスピスやがんの相談・支援センターで共通して感じたのは、訪れる人への配慮が、建物の内外に行き届いていることでした。外光を採り入れたサンルームやお茶やコーヒーの用意、壁にはアート作品が飾られ、廊下は木の床材、外には静かに過ごせる美しい庭があるなど。病気で心身の悩みや生活の問題を抱えた人にとって、スタッフの対応の仕方と併せて、美しく温かみのある環境による癒し効果も大きいはず。身近なところから工夫したいと思いました。

訪問先で詳しいレクチャーを聴けたのも収穫でした。ホスピスは死を間近にした人だけのものではなく、病気の早い段階から生活の質をよくするための支援を行っていること、がん以外に神経難病や認知症、呼吸器や循環器疾患の患者さんも対象で在宅ケアも多いこと、市民や看護師向けの教育拠点にもなっているなど、時代とともにすすんでいるホスピスのあり方にイメージが大きく変わりました。

伝統あるセント・クリストファー・ホスピスで運動器具をつかってリハビリに励む男性患者の姿にも驚かされました。カンファレンスでは、患者を生活面から支える社会福祉の専門職が重要な役割を担っているとの説明に心強いものを感じました。

セント・ジョセフ・ホスピスでは、正規のスタッフ以外に、450人近い登録ボランティアがさまざまな役割を担っていることに興味をひかれました。ちなみに、私たち一行の「おもてなし」担当は20年来ボランティアを続けているという白髪の女性（77歳）で、「いろいろな人に会えるのが楽しみ」と話す笑顔が印象的でした。

英国の医療制度では補完療法も認められており、鍼やマッサージ、リフレクソロジーの専門家がベッドサイドに来てくれるとのこと。音楽療法やアートセラピーなどの他に、市民向けのイベントを開きホスピスを身近に感じてもらう努力をしているのも、ボランティア活動を活発にする要因と思います。

がん患者さんのための相談支援センター「マギーズハウス」は赤い壁のモダンな建物で明るい中庭などゆっくり過ごしたくなる場所でした。センター長のバーニー・バーンさんは、「一緒にお茶を飲みながら話を引き出すことが大事」といい、「経験豊富な専門家として病院ではできないサポートを行っている」とのことでした。

病院との関係については、センターでもホスピスでも、活動の独自性を主張するためか、病院と連絡はとっているが、「あくまでも独立した別個の団体」と強調してたのも印象的でした。

（NPO法人
日本医学ジャーナリスト協会）

マギーズハウス・中庭をのぞむ

Visiting St. Joseph's, St. Christopher's and Maggie Center

樋野 ジーン

Visiting St. Joseph's, St. Christopher's and Maggie Center were very informative. I was surprised to learn that hospice care is free for all patients and that generally a patient will be admitted within 24 hours. I think one idea that I had of hospice from America and Japan was, a hospice is a place where people go in the final stages of an illness before death. It was encouraging to hear that hospices in England are a place where patients go to learn to live with their disease and to live fully.

Changing fundamental ideals in any country is difficult, but if Cancer Philosophy Clinics and Cafes could help patients and their families to learn to live fully all their days that would be wonderful.

がん哲学外来 in 帯広

西原 広史

北海道十勝にある北斗病院は、PET-CT・Tomo Therapy などの高度な治療を行える機器を備え、先進的ながん医療を目指す一方で、福祉村構想の一環として十勝リハビリテーションセンターを立ち上げ、総合的ながん医療の実現を目指している。

その取り組みの一環として、北海道で初の本格的な「がん哲学外来」の開設を目指し、昨年の九月に続いて、今年四月に再び樋野興夫先生にお越し頂き、「がん哲学外来」の実践と講演会を開催した。

今回の外来で樋野先生は、前立腺癌の70代の男性患者さんが家庭で感じている煩わしさが「余計なお節介」によるものであることを説明し、妻に対して「無頓着なほどに大胆に」なることの大切さをアドバイスされていた。「今このがんでは死なない」、そして「病気はあっても病人ではない」という気構えを話され、ご夫婦ともにこれからの人生の使命を強く認識されたようであった。前回に続いて外来を見学させて頂いた自分にとっては、樋野先生の「暇げな風貌」の中に宿る患者さんへの深い愛情、そして医師としてなすべきことの奥深さを感じる時間であった。

「第二回がん哲学外来 in 帯広～偉大なるお節介～」と題された講演会は、一般市民32名を含む133名が参加し、会場は盛況でスタッフが慌てて椅子を増設するなどの対応に追われた。一般市民の方がメモを取りながら特に熱心に聴講される姿が見られ、市民の方々にとっても大変興味深いご講演だったことが伺えた。北斗病院では、今夏にはがん患者さんと医療スタッフが一緒にイギリスのホスピスの見学をするツアーの企画や、12月のサービス付高齢者住宅の竣工に合わせて、「がん哲学カフェ」の定期開催を予定している。

盛況の講演会（参加者133名）

新座志木・カフェ

岸尾 光

4月20日（日）、午後2時から「新座志木がん哲学外来・カフェ 開所記念プログラム」を開催しました。前半は、樋野先生と「がん哲学学校 in 志木」の榊さんの講演です。当日の会場はほぼ満員になるほどの大盛況でした。後半3時からのカフェにも半数以上の方が参加されました。私の教会のメンバーは会場関係や茶菓準備、応援で駆け付けたお茶の水メディカルカフェの方々はファシリテーターとして携わり、4つのテーブルで対話カフェが持たれました。テーブルごとに偶然「仲間」を見つけ意気投合したりお互いの話に耳を傾けたりと、どのテーブルでも話が尽きません。「ずっと話していてもらいたい」という思いを断ち切り、閉会のお知らせをしました。

カフェの合間には樋野先生に個人面談の時間も取って頂きました。講演を聞いた方々は「お話が面白かった」、「先生にあの言葉を言って頂いて救われた」と感想を述べ、面談やカフェに参加された方々も良い時を過ごされたようです。

閉会後、樋野先生は「参加者の方々が来た時よりも明るい顔で使命感も持って帰って行かれ良かったですね」と言っておられました。

妻が3年前に実母をがんで見送ったこと、カフェに誘いたい方々がいることを理由に開設を考えていましたが、働きの重責故に躊躇していました。しかし、樋野先生はじめ多くの方々の励ましとご支援を得て、先生に顧問にもなって頂き「医療の隙間を埋め、参加者に寄り添うカフェ」を目標に常設を決断しました。開所式に誘ったものの参加できなくなってしまった方々もいて「即効性と英断」「偉大なるお節介」の心得を実感しました。今後は、私もスタッフも学び続ける姿勢を忘れずに、細くとも長く続けられるカフェを目指して参りたく存じます。

（新座志木バプテスト教会）

広島平和記念「がん哲学外来」講演会

新田 敦子

平成26年4月23日、樋野興夫先生による「がん哲学外来～人間的な責任で手を差しのべる～」が開催され、広島の地に新たな一ページが記されました。

原爆で壊滅的な被害を受け、その後不死鳥の如く復興をとげた「ヒロシマ」は、海外では東京よりも有名な場所だと聞いています。先生から、そのような地に「がん哲学外来」という活動がないのは残念だと言われ、それならばと手を挙げたのがそもそものきっかけでした。

しかしながら、広島では「がん哲学外来」の知名度が低いため、「がん哲学外来」がどのようなものか知っていただくこと、そしてメディカル・カフェの雰囲気を体験してもらうことが今回の開催の趣旨となりました。前座での「家族としての思い」には多くの方の共感のうなずきが見られ、続いて行われた先生の講演には、様々な立場の約80名の参加者が熱心に聞き入っておられました。

樋野先生は、「がん哲学外来」は来られた方が抱えている問題を「病人」としてではなく、日々生活しているひとりの人間の悩みとしてとらえ、同じ人間として対等の目線に立って「人間学」を学ぶ場でありたいと語られ、その一言一言が参加者の心に奥深く届いたのは言うまでもありません。

原爆と「がん」…、私の愛する広島の地に次なる使命があるとすれば、今回のご縁を大切に、温かい人に囲まれ、寄り添い、癒され、心を休める新たなネットワーク作りが急務ではないかと思います。

「広島でも、メディカル・カフェを！」。微力ですが、今後もお手伝いする事が出来ればと願っています。

（福祉ビジネス研究所）

春日部がん哲学外来&メディカルカフェ

高野　みどり

平成24年11月、忘れもしない樋野興夫先生との出会いです。それは、勤務先で手にした一枚のチラシでした。当時、私はがん患者さんが医療者から受ける言葉や態度に傷つくことがあり、何とかしたいと考えていました。早速講演会に参加しました。そこで樋野先生が語られたのは、「がん哲学外来」のモットーは「暇げな風貌」と「偉大なるお節介」ですと、にこにこ笑顔で「暇げな風貌」を目前で実践してくださいました。

病理の医師が忙しくない訳がありません。私にとってどの言葉も初めて耳にするものでした。新鮮というよりむしろすべてが驚きでした。また、夢のような患者中心のがん患者さんへのケアが語られました。主人が通院する国立がんセンター東病院でも「がん哲学外来」が開催されていることを知り、牧師である主人を伴い、出かけました。牧会中の教会で、メディカカフェを開催したい旨をお伝えすると、快くお受けくださり、H25年4月には第一回目の「がん哲学外来&メディカルカフェ」が開催さまました。まさに、「速効性と英断」をもっての開所でした。

H25年4月には、「分かりやすいがん哲学～医療の隙間を埋めるかけ橋～」、H25年9月「がんと暮らす人のために～がん哲学の知恵～」をテーマに樋野先生をお迎えして、講演会を開催しました。以後月一回の定例会を行っています。内容は、「樋野興夫の日曜患者学校」を用いて読書会と参加者の近況報告などシェアリングを行っています。現在は5月25日の開所一周年記念講演会&シンポジュームに向けて、準備中です。

これからは教会を中心に地域病院等の連携を目指して、活動を広げていきたいと考えています。

（上武大学看護学部看護学科）

まちなかのオアシス メディカルカフェin宇都宮

平林　かおる

昨年の4月に「まちなかメディカルカフェ in 宇都宮」を開設してからちょうど一年が経ち、4月27日に樋野先生にカフェにお越し頂き、一周年記念講演会「私の目にはあなたは高価で尊い」が行われました。樋野先生のがん学を通しての人間学に対する奥深い思考に触れ、がん患者でありながら自身の必要性に気づき、人との繋がりを感じ、尊厳を持って生きることの重要性を説かれる先生の考え方にあらためて感銘致しました。

自らも4年前に乳癌を発症し、がんを経験した医療者の自分にできることはと模索する中、紹介されたお茶の水メディカルカフェでの心地良い空間を栃木でも作りたいと、思いを共有する医師数人とカフェを開設しました。

今回、大勢の方に参加していただき、名前通り「まちなかのメディカルカフェ」になってきたことを実感でき、また、場所を提供していただいている下野新聞NEWS CAFE（相談者の飲み物も無料で提供）を始め、多くの方に支えていただきながら活動が成り立っていることに感謝する一日でした。

カフェは月一回日曜日に開催され、初めは相談者二人からの出発でしたが、一年間で150人以上の方が訪れ、初回からほぼ毎回参加されている方や、中には相談者からスタッフへと、支援される側から側へ立ち位置を変えられた方もいらっしゃいます。

スタッフは医師、看護師、医療社会福祉士などの医療者、教員、市民ボランティアなど50名を超える多職種で構成され、このうちがん経験者が12人いて、相談者の必要性に応じた対応を心掛けています。

活動は二年目に入りますが、カフェを訪れる方に寄り添いながら、ささやかな「まちなかのオアシス」になれればと思っています。

（栃木県がんセンター病理診断科）

がん哲学学校 in 志木 開校から一年を経て

榊　友希

2013年8月に開校した『がん哲学学校.in志木』は毎月一回のペースで行われ、2014年5月段階で第9回まで回数を重ねてきました。

年に二回の樋野興夫先生の講演会には、20～40名の方々が集まってくださいました。樋野先生のご講演を直接聴けることは数少ないチャンスとして、地域の方々も楽しみに来られます。通常のがん哲学学校には毎回新規の参加者も含めて3～8名の方々が来て下さっています。ホームページや口コミで情報を得た方が自ら申し込んで来てくださるのです。

私たちは、ただ参加者の人数を増やすことよりも、本当に対話の場が必要な人々にとって必要な場所であることを目指しています。ですから、その都度参加して下さる方の思いをじっくりみんなで傾聴し、それぞれの立場から意見や思いをシェアします。今まさに癌の治療に取り組んでおられる方、そのご家族、ご遺族、近隣地域の方が同じテーブルで対話するのです。癌治療について、医療について、社会情勢について、心の問題について、人生について…。内容も多岐にわたります。もちろん話したくない時は無理にお話ししなくても良いですし、話したいことや伝えたいことがあれば伝えられる場です。年齢も立場も違う人々が率直に人生について語り合う。この場所に来た目的や期待もそれぞれ違うでしょう。それでもお互いの立場を尊重して、じっくりと話に耳を傾ける。そこにいるだけでも何かを感じ、何かを学ぶことになります。私自身、毎回新たな学びや深い気付きを得ていることを実感しています。

この場所が「学校」であることの意味は、参加者一人一人が実感していくのだと思います。今後も人間としての学びに期待して、地域の方々に必要な場所として根付いていけたらと願います。

（みんなの家・志木）

新渡戸稲造記念 さっぽろがん哲学外来

中里 準治

「さっぽろがん哲学外来」は北海道で最初に立ち上がったがん哲学外来カフェで、設立は昨年8月24日です。冠の「新渡戸稲造記念」は、熱心な新渡戸研究者でもある樋野先生の直々の命名で、札幌にいる私たちはこの名前に強い愛着と誇りをもっています。

現在、常連的な参加者（コアメンバー）は15名ほどで二ヶ月に一回、講演と勉強会主体の例会を開いています。

私たちの「さっぽろがん哲学外来」は、自由なカフェ形式で自身ががんを患ったり、配偶者や親兄弟あるいは親友などをがんで失ったり闘病を余儀なくされている普通の人たち、言い換えれば、どこにでもあるごく普通の光景の中に存在していて、特に病院やドクターを始めとする医療関係者の後援や支援を受けているわけではありません。なので、がんで苦しまれている方々の脇にそっと立ち添えるようにと願い、動いてはいますが、如何せん宣伝がヘタです。周りに存在を知って貰わないとにかく始まらないし、内輪だけで出てくる知恵も限界あり、と開設当初も今も相変わらず、参加者集めには苦労しています。

さて、今年の方向は、参加したらいい話が聞ける、とか気持ちが軽くなったよと思って貰えるようにお互いに切磋琢磨しよう、ということで、身近な人が講師をする小さな講演（抗がん剤の宅配をしている薬局の薬剤師さんに来て貰って、宅配の様子や実用的な話、一般教養としての全国のがん哲の動きとか、脳と体という観点での古武道の話、遺体化粧師の勉強と実践をしている人の話など）を積極的にやっていく予定です。

このほかにコアメンバー一人一人が仕事や交際などを通してがん患者さんと向き合うとして、その時の知識とか体験の共有とかメンバー同士のスキルアップのための研修センター的な役割も重要なので、このための情報共有の仕組みも整備したいと思っています。

新渡戸稲造記念・さっぽろがん哲学外来カフェ

現代人の持つ「隣人性」

岩手県立中央病院 加藤 誠之

「隣人」という言葉は、奥深いです。思い返せば、記念すべき第一回がん哲学外来市民学会での樋野先生の講演は「客体的隣人観から主体的隣人観へ」というタイトルでした。メディカル・カフェのもつ役割としては、隣人として暖かく手を差しのばす、寄り添うということが根本にあるとされていますが、今回は「隣人」というものを考えてみることにしました。

社会を構成する人々を、どう見るかということは時代を反映すると思います。近代以前では「民」、資本主義社会では「労働者」、大衆社会では「一般大衆」、消費社会では「消費者」となるでしょうか。今や、労働者としての人間のあり方すら、やや希薄となり、消費者としての在り方を中心に据えた社会になりつつあると思います。

消費社会とは何かというと、ちょっとした好み、嗜好、「○○らしさ」という価値感が幅をきかせる社会です。ナチュラル・メークというものがありますね。化粧をしていないように見せる化粧ということなのでしょうか。化粧の持つ本来の意味よりも、自分らしさを表現することに重きを置いているとしか考えられません。消費社会とは、周囲との差異に価値を見出す社会、商業主義的に醸し出された個性が重要視される社会です。

消費社会において「がん」という病気と直面した場合、「旅行に行った時は気が紛れたが、すぐに落ち込んでしまった」、「ネットで何か良い薬がないか探している、何か良いものはありませんか」、「もっと違う先生、違う病院で診てもらえば良いのでは」という風に、往々にして他人とは異なる経験や品物に価値が置かれているように思います。すなわち、消費社会での隣人とは、自分の人生と対比するもの、比較の対象といえます。

がん哲学外来やメディカル・カフェは本来の人間性に基づく隣人観をもっています。病気という垣根を作るより人間としての共感の場となろうとしています。現代の消費社会にあって、別の方向に足を踏み出す一群であり、正に主体的に隣人となろうとする試みです。

歴史を振り返れば、ローマ帝国が拡張していくと、最後にローマには、観光名所（遺跡）しか残らなかったのです。消費社会も消費という野火が広がっていくと、最後にはゴミ捨て場しか残りません。

がん哲学外来やメディカル・カフェを行うということは、主体的に隣人となるということを通して、次の社会を模索することなのかもしれません。

編集後記

ニュースレター編集人 星野 昭江

カッコウがけたたましく鳴き騒ぐので見上げるとメスを取り合っての空中戦を繰り広げていて、思わず見惚れた。野鳥も生きていくのに懸命な季節である。

四月の初め「清里カフェ」に足を運んだ。カフェを開いてまもなく逝った阿部千鶴さんに「逢う」ために。かつての懐かしい人たちが静かに集い、偲び、春の陽光の降り注ぐ「清里カフェ」でひとときを過ごした。樋野先生が「阿部さんは良いものを遺していかれましたね」と話された。

全国各地からは、新規に立ち上げられた「がん哲学外来カフェ」からの声が届く。と言うより「飛びこんでくる」といった風である。「用意した席が足りない、話が尽きない、次のカフェはいつにしようか」…、スタッフはとても「暇げ」になどしていられない、その様子が直に伝わって来る。

クルーズで親しくなった別府のKさんからは「下船してすぐ福井の講座に申し込みました。我が家でカフェを早く開きたい、学びたいです」というお便りが届いた。編集子は大いに慌てた。まだ申し込みをしていなかったので。

暑い夏は、もうそこまで！